

高住宮ノ谷遺跡 たかすみみやのたにいせき & 高住牛輪谷遺跡 たかすみうしわだにいせき



寒い季節のお仕事

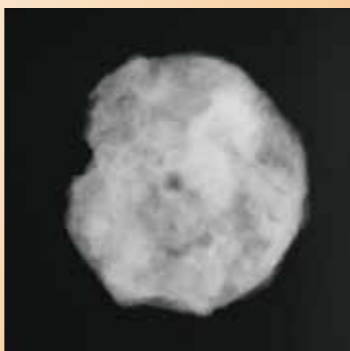
現在、調査成果をまとめた発掘調査報告書作成に向け、高住宮ノ谷・高住牛輪谷両遺跡で見つかった遺物の整理作業を行っています。現地調査は、気候がよい春～秋を中心に行うので、どうしても整理作業は寒い冬に行うことが多くなるのです。

さて、昨年度の高住宮ノ谷遺跡の調査で見つかった遺物に、サビと土に覆われた直径5cmほどの鉄製品がありました。この遺物のX線写真を撮影したところ、笠状の鉄板の中心に孔があげられている事がわかりました。これは、「紡錘車」と呼ばれるもので、動物の毛や植物の繊維などから糸を紡ぐ際に、「撚り」をかけるためのおもりとして使いました（イラスト参照）。ちなみに、高住宮ノ谷遺跡では、土製（素焼き）と石製の紡錘車も見つかっており、石製紡錘車には、かすかに線で刻まれた文様が残っています。

今時分のように雪が降り寒い季節には、建物の中で糸紡ぎや機織りなどを行っていたのだろうか、などと想像しながら、日々、遺物と格闘しています。



高住宮ノ谷遺跡で見つかった鉄製紡錘車（手前）と、土製紡錘車（左奥）、石製紡錘車（右奥）



鉄製紡錘車のX線写真です。中心に孔があるのが分かります。



冬の寒さも和らぎ、少しずつ春の気配を感じるようになりました。長きにわたった鳥取西道路関連の発掘調査でしたが、職員一丸となって現地調査を無事に終了させることができました。

これからは、得られた情報や出土遺物の整理をさらに進め、その成果を皆様にお届けしていきたいと思っております。

鳥取県教育文化財団 調査室

検索

(公財) 鳥取県教育文化財団 調査室

〒680-1133 鳥取市源太 12 番地

TEL: 0857-51-7553 FAX: 0857-51-7550

メールアドレス: tottori-kyobun@kyobun.sakuratan.com

HP: http://kyo-bun.sakura.ne.jp/chosasitsu_new.htm



鳥取西道路の遺跡を掘る!

第 82 号 2016 年 2 月 23 日

ウシ・ウマは、エンジンのなかった時代の動力として使われ、日本では撫牛や絵馬などのように願い事をする場面にも登場する動物です。今回は、大橋遺跡からの出土例を中心とした、ウシ・ウマについてのお話です。



祈りを託された牛馬



① 県内最古級のウマです

ウシは約 8,000 年前、ウマは約 6,000 年前にユーラシア大陸で家畜となりました。日本には朝鮮半島を経由して導入され、古墳時代中ごろ（約 1,550 年前）に各地に普及したと考えられています。

大橋遺跡から出土したウマ（写真①）は、まさにこの時期のもので、集落域の川の跡から、祭祀具などとともに頭部のみが出土したことが注目されます。これとよく似た出土例は、朝鮮半島からきた馬飼集団の本拠地と考えられる大阪府四條畷市の遺跡で多く知られており、そこではウマの首を切り落とす祭祀が行われていたものと推定されています。このような外来の祭祀が、ウマの飼育や使役の技術とともに、大橋遺跡にも伝わっていたのかもしれない。

続く律令期（7～8 世紀）になると、都の造営や軍事などの面でウシ・ウマの重要度はさらに高くなり、各地に飼育や繁殖を行う官営の「牧」が設置されました。やがて、ウシ・ウマの生産は私的にも行われるようになり、地方の有力者には多くのウシ・ウマを保有するものも現れます。

平安時代（約 1,100 年前）の大橋遺跡では、川の跡からたくさんのウシ・ウマの骨が出土しており、ウシは、田んぼに残された足跡から、農耕にも用いられていたことが分かります。また、ウシ・ウマの頭蓋骨だけが、人形などの祭祀具といっしょに出土したものもありました（写真②）。

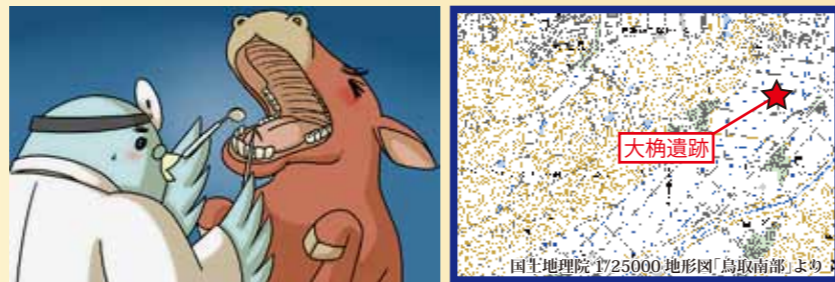
古代の文献からは、雨乞いや病氣平癒など様々な祭祀で、ウシ・ウマがいけにえとされ、その肉も食べられていたことがうかがえます。大橋遺跡の出土例が全ていけにえにされたものかは判断が難しいところですが、ウシ・ウマが人々の生活を支えてきただけでなく、祭祀のなかでも重要な役割を果たしていたことが分かります。



② 下顎骨がなく、頭蓋骨のみです

大楠遺跡

だいかくいせき

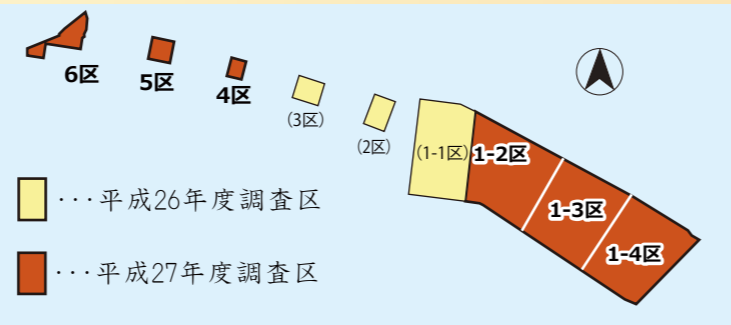


書いてあるのは「大…」?

1-2区の現地での発掘調査が終了し、出土した遺物の整理を進めていると、ある土器に文字らしき記号が2つ彫られていることが判明しました。刻書土器と呼ばれるものです。

1つ目は「大」と読むことが出来ますが、2つ目についてはどのように解釈すればよいか、まだわかっていません。間違えたのか、彫る途中でやめてしまったのか?

さて、この土器を持っていた人は、一体何と彫ろうとしたのでしょうか。見つかった所が大楠地区ですし、「大楠」だったら良いな〜と想像しますが…、なかなか難しいかもしれません。一体この記号が何なのか、解明される日が楽しみです!



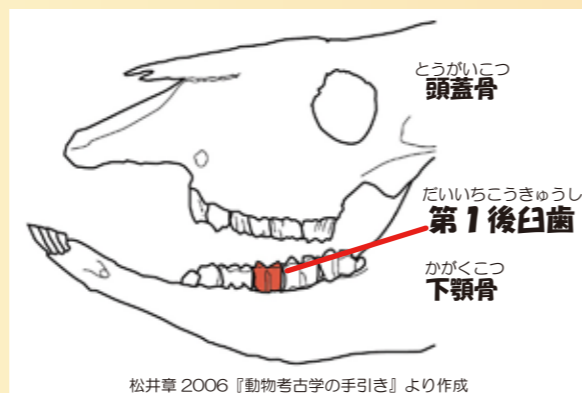
大楠遺跡 1-2区出土 刻書土器「大□」

ドナドナ〜♪子ウシを乗せて?

1-2区で出土した骨を整理していると、少し変わったものがみつかりました(右下写真)。ウシの下あごの骨であることは分かりましたが、一般的なウシに比べ小さく、歯の形も少し違っていました。そこで、色々な本で調べたり、専門の先生にたずねた結果、これが子ウシの下顎骨であることが分かりました。

ウシは、ヒトと同じく乳歯から永久歯へ生え変わります。この下顎骨には乳歯がまだ残っており、生えている永久歯は第1後臼歯とよばれる1本だけです。この永久歯は、ヒトでは6才で生えるため「6才臼歯」ともよばれますが、ウシでは生後半年くらいで生え変わります。また、下顎骨のなかに収まっている第2後臼歯は、1才を過ぎてから生える永久歯ですので、この子ウシは1才くらいということが分かります。

この子ウシは、①乳離れして間もなく連れて来られた、②大楠で産まれた、のいずれかですが、当時のウシがどのようにして生まれ育ち、どのように利用されたのかを考える上でも、とても興味深い発見です。



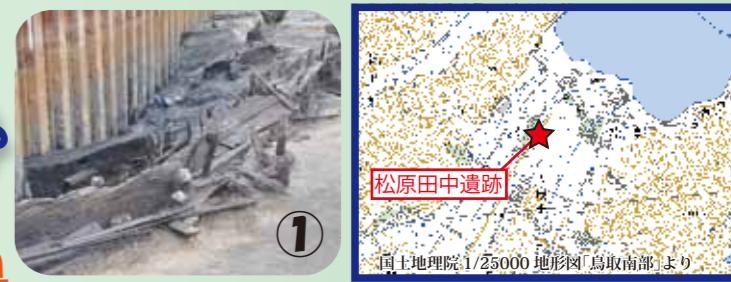
おとなのウシの歯(すべて永久歯)



出土した子ウシの下顎骨

松原田中遺跡

まつばらたなかいせき



ぞくぞく! まだまだあるぞ木の道具

3区北部の溝に伴う矢板列(写真①)の北側から、古墳時代前期頃に捨てられた土器や木器が多数見つかりました。それらのうち、珍しい木の道具を前号に続いて紹介します。②: 琴柱(琴の弦を支える部品)の形に似た木製品2点ですが、少し形が違います。琴を奏でていたとすれば、風流ですね。

③: ピistolのような形ですがもちろん違います。棒状の部分は断面がカマボコ形で裏は平ら、2か所の目釘孔もあります。撥形に広がる部分は外に反っていて、末端は平らです。容器の脚と推定できますが、そうするともう1~2本必要です。

④: 周囲にびっちり細かな刻み目がある板です。3個の孔が貫通し、中央の孔には棒が刺さっています。編台、火起具、目盛板、ささら、鋸歯を刻んだ刀剣形など、似て非なるものはあります。帽子掛けというのがいちばんしっくりきますが、残念ながらいまのところは用途不明です。



下の幅: 3.5 cm ②

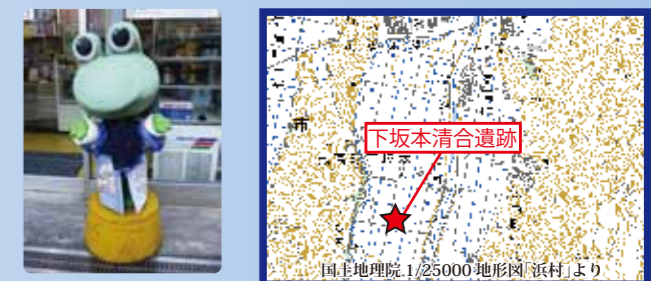
左上の長さ: 23.7 cm
最大幅: 5.8 cm ③



長さ: 27.2 cm
幅: 4.3 cm
棒の高さ: 4.7 cm ④

下坂本清合遺跡

しもさかもとせいごういせき



追跡! あの井戸杵は今?

昨年の10月号(第78号)で現地から取り上げた井戸杵は、現在、埼玉県にある保存処理専門の会社のもとで、保存処理作業を進めています。先日は作業の途中経過を確認するために埼玉県に赴き、井戸杵との久々の対面を果たしてきました。

保存処理とは、土中や水中から取り出した遺物が空気に触れることで、干からびたり錆びたりして壊れるのを防ぐために、特殊な薬材などをしみこませて強化する方法です。遺物に合わせてさまざまな手法が採られますが、この井戸杵では「真空凍結乾燥法」が行われています。薬材を溶かした60度の熱湯に漬け込むこと数か月。傾合いを見計らって引き揚げて、今度はマイナス30度以下で急速凍結し、真空状態で氷を昇華させて乾燥させます。

今回は乾燥処理が終わった状況を確認しました。取り上げた井戸杵にはいくつかの亀裂が入っていたこともあり、大きく3つのパーツに分かれてしまいました(右写真上)。でも安心してください。組み合わせればほらこの通りです(右写真下)。今後は破損箇所を修復・復元して、来月の半ばには作業が完了する予定です。

埼玉県西川口駅前にて



ほほう、こうなりましたか



合体!(変形はしません)